HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	車持千年の吉野讃歌
著者	村山，出
引用	北海学園大学人文論集，13：A1-A21
発行日	1999-07-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

車持千年の吉野讃歌

村山出

一　はじめに

奈良前期のいわゆる宮廷歌人笠金村や山部赤人に立ち混じり、一瞬の光芒を放った歌人がいた。吉野離宮と難波宮で二首の長歌を残しただけで退場した車持朝臣千年である。千年の吉野従駕歌は次の通りである。

車持朝臣千年の作る歌一首并せて短歌

味凝り　あやにともしく　鳴る神の　音のみ聞きし　み吉野の　真木立つ山ゆ　見下ろせば　川の瀬ごとに　明け来れば　朝霧立ち　夕されば　かはづ鳴くなへ　紐解かぬ旅にしあれば　我のみして　清き川原を　見らくし惜しも

（6・九一三）

反歌一首

滝の上の三船の山は畏けど思ひ忘るる時も日もなし

（九一四）

或本の反歌に曰はく

千鳥鳴くみ吉野川の川音のやむ時なしに思ほゆる公

（九一五）

あかねさす日並べなくに我が恋は吉野の川の霧に立ちつつ

（九一六）

右は、年月審らかにあらず。ただし、歌の類をもちてこの次に載す。或本には、養老七年の五月に、吉野の離宮に幸す時の作、といふ。

左注の「或本」によると、この作品は養老七年（七二三）五月九日から十三日にかけて実施された元正女帝の吉野行幸に従った車持千年が、笠金村とともに奉った従駕歌であるという。これを積極的に否定する根拠はないであろう。

長歌の構成を見ると、

味凝り　あやにともしく　鳴る神の　音のみ聞きし　み吉野の　真木立つ山ゆ　見下ろせば

までは、日頃憧憬していた吉野の山に登り立って眺望する作中人物の立脚点を示し、

川の瀬ごとに　明け来れば　朝霧立ち　夕されば　かはづ鳴くなへ

までが、吉野川の瀬ごとの讃美するに相応しい佳景を簡潔に描き、かわずの声に誘われる心情を、

紐解かぬ　旅にしあれば　我のみして　清き川原を　見らくし惜しも

と自分だけがこの佳景を讃美するのは残念だ、と結んでいる。つまり、吉野の高所に登り立ち、望まれる自然の景を述べ、(自分だけが見る惜しさを包摂しつつ)讃美で締めくくるという構成は、国見歌の型を踏まえている。

次に、反歌一首は、三船山に対する畏敬の念を契機に、片時も忘れられぬ思いに執する心を表現する。この作品には或本反歌もあって、その第一反歌は、「やむ時なしに思ほゆる公」と寸時も念頭から離れない「公」の存在を表現し、第二反歌は、思慕の情を吉野の川に霧のように纏綿する「我が恋」と表現している。

二　代表的諸説

この作品に対する代表的な諸説を一覧表にして掲げると次の通りである。

類	思慕の対象	長反歌における対象	或本第一反歌「公」	作者	提唱者
(1) 私情歌					
A	女性	妻	妻	男性	折口信夫氏
		妻	妹	男性	窪田空穂氏
		貴女	君様	男性	金子元臣氏
B	女性・男性	妻乃至愛人	愛人	男性の代作	土屋文明氏
		妻	友人	男性	武田祐吉氏
		妻	君(男)	男性	澤瀉久孝氏
		妻	(不合)	男性	中西　進氏
C	男性	貴紳	貴紳	女性	井村哲夫氏
		夫	夫	女性	吉井　巌氏
D	不特定	あの人(男女双方)	あの方(女の立場)	男性	伊藤　博氏
(2) 儀礼歌					
E	男性	皇太子	皇太子	男性の代作	清水克彦氏

この作品について、諸説の殆どは男性作者が女性に対する思慕の心を述べた私情歌と見ているが、武田祐吉氏『全註釈』で或本第一反歌の「公」は男性とみるべきだと指摘されて以来、「思慕の対象」をどう見るかで解釈が多岐にわたり、作者千年に

ついても女性であろうと想像される井村哲夫氏の説(「車持朝臣千年は歌詠みの女官ではないか」『赤ら小船　万葉作歌作品論』昭和61)も提出されるに至った。

早い時期に「思慕の対象」を女性と見たA説の中でも、①家に置いてきた「妻」(窪田空穂氏『評釈』)とも、②或本第一反歌の「公」に注目して「貴女」或いは「愛人」(金子元臣氏『評釈』)とも推定されるなどの揺れが認められるが、金子氏は反歌の「三船の山」に準擬して「或貴女」と見られ、また土屋文明氏は反歌における対象を「家妻乃至別れて来た愛人」、或本第一反歌の「公」を「愛人」と解され、「従駕の心持を歌つて居るのであるが、それは作者自らの実感か、或は従駕の宮人等の心を代つて歌つたのか分からぬ程、迫力に乏しい作」と代作の可能性を考えられた(『私注』)。

「思慕の対象」が男女にわたると見るB説では、先ず武田氏が対象を分けて、反歌では「妻」とされ、或本第一反歌では「友人」に歌いかけていると考えられて、「芳野の離宮における交友同士の歌で、社交的な性質における成立がこの形を採るに至らしめた原因」であるとされた。澤瀉久孝氏(『注釈』)は反歌における対象を「都に残して来た妻」とされ、或本第一反歌の「公」について、「君は通例男をさす(略)殊に今は『公』の文字があり、男に対する文字である」と説明され、反歌では「妻」、或本第一反歌では「男」とされる。中西進氏(『萬葉集』講談社本)は両歌は「合わず」とされている。

このように反歌と或本第一反歌の対象を同一と見ようとすると矛盾する。対象を別と考えることによって矛盾を解消する解釈も示されているが、C説の井村氏は作者千年を女性と想像され、両反歌の対象を千年の「貴紳の愛人」(身分の高い愛人)と推定されることによって、両者の矛盾を越えられた。吉井巌氏(『全注』)はこれを肯定されるが、D説の伊藤博氏(『釈注』)は、千年女性説を否定されて、千年の歌を金村の賞景歌と組合せられた「故郷に置いてきた愛人を思う」望郷歌と見て、千年の歌は「耳にしたその場の宮廷人たちが、それぞれに故郷に残して来たいとしい人を想い起こすことを期待し」た「代表的感動による歌」であるとされ、さらに

千年の歌は、女の立場の詠なのか男の立場の詠なのか明確でない。これは、おそらく千年が意識した結果で、吉野行幸の宮廷集団が男女双方の官人によって織りなされていたことを考慮して、ことさら不明確な表現をあやつったのであろう。

と考えられた。

これら従駕の場における私情歌と解される大方の説に対して、唯一、清水克彦氏（「養老の吉野讃歌」『萬葉論集　第二』昭55）は千年の歌を儀礼歌と見られた。清水氏は、都に留まった人に対する相聞の情を支えとすることによって、讃美の情を表現した歌と解され、作者は元正女帝の立場で、都に留まった皇太子を思っての作であろう、と推定された。そして金村の歌と千年の歌によるこのような分担の作は、人麻呂の「宮ぼめ」と「君ぼめ」をセットにした吉野従駕歌が先例となっているといわれる。清水氏はこの吉野行幸が「譲位に関連するある種の儀礼的な意味」をもっていたことに注目して、このように主張されたのであった。

しかしながら、皇太子が都に留まっていたという想定は如何なものであろうか。吉野行幸に同じ趣旨を認められる小野寛氏（「万葉集従駕歌の一つの問題――その空白――」『國語國文論集8』昭和54）や吉井氏、伊藤氏は元正女帝と皇太子首が必ずや一緒であったろうと推定され、小野氏はこの行幸は「皇太子首皇子を先頭に立てて」実施されたと主張されるように、その可能性の方がはるかに強い。とすれば清水氏の説は成立しがたいし、これを受け継ぐ説も見受けられない。

このように諸説を顧みると、千年の従駕歌に私情性を認め、従駕の場における望郷的な歌と見ることもできるけれども、しかし、儀礼歌としては全く考えられないか、検討してみる余地があるのではないかと思われる。

その理由の第一は、この時の吉野行幸が「譲位に関連するある種の儀礼的な意味」をもっていたことを、小野氏をはじめ、この歌に対して見解を異にする吉井氏・伊藤氏・清水氏等がともに重視されており、この点は全く同感だからである。

理由の第二は、吉野従駕の長歌を作成するにあたって、吉野という歌の場と柿本人麻呂以来の讃歌の伝統によってある種の規制が働いていたことは否定できず、千年の歌だけが私情歌として孤立的に扱われていることに、いささか疑念を感じざるをえないからである。

三　吉野従駕歌

『万葉集』におさめられている吉野従駕歌の長歌の題詞をあげると次の通りである。

(1)　宮廷歌人の吉野従駕歌

①持統朝――柿本人麻呂

吉野の宮に幸す時に、柿本朝臣人麻呂の作る歌

（1・三六～三七）〔離宮讃美〕
同　（1・三八～三九）　〔天皇讃美〕

②元正朝――笠金村・車持千年

養老七年癸亥の夏の五月に、吉野の離宮に幸す時に、笠朝臣金村の作る歌一首并せて短歌（6・九〇七～九一二）〔離宮讃美〕

当面歌〔或本、養老七年の五月に、吉野の離宮に幸す時の作〕（6・九一三～九一六）〔　？　〕

③聖武朝――笠金村・山部赤人

神亀二年乙丑の夏の五月に、吉野の離宮に幸す時に、笠朝臣金村作る歌一首并せて短歌（6・九二〇～九二二）〔国土讃美〕

山部宿祢赤人の作る歌二首并せて短歌（6・九二三～二五）〔国土讃美〕

山部宿祢赤人の作る歌二首并せて短歌（6・九二六～二七）〔狩猟讃美〕

（天平）八年丙子の夏の六月に、吉野の離宮に幸す時に、山部宿祢赤人、詔に応へて作る歌一首并せて短歌（6・一〇〇五～六）〔離宮讃美〕

(2)　大伴氏の吉野従駕預作歌

①暮春の月に、吉野の離宮に幸す時に、中納言大伴卿、勅を奉りて作る　歌一首并せて短歌　未だ奏上を経ぬ歌（3・三一五～六）〔離宮讃美〕

②吉野の離宮に幸行す時のために、儲けて作る歌一首并せて短歌（18・四〇九八～一〇〇、大伴宿祢家持、興に依りて作る）〔臣従誓約〕

持統・元正・聖武朝における吉野従駕歌には、風巻景次郎氏の卓説「山部赤人」（『風巻景次郎全集　第3巻』昭和44）でも指摘されているように、天皇観の変容にともなう表現の変遷が見られるが、しかし基本的には、天皇の讃美、離宮の讃美、天皇が臨む自然の讃美、天皇の催す狩猟の讃美、天皇に奉仕する大宮人の讃美、という姿勢は受け継がれている。

吉野の他の行幸地では相聞的な従駕歌を表現した笠金村でさえも、吉野においては厳粛な讃歌を披露しており、千年の吉野従駕歌が私情性の強い望郷歌であるとすれば、唯一の例外となろう。千年の歌も柿本人麻呂以来の伝統的な吉野従駕歌の路線上で理解することができれば、その方がよりふさわしいと言えるのではあるまいか。

先例となる持統朝の人麻呂の吉野従駕歌二首は「宮ぼめ歌」と「君ぼめ歌」からなる。いま聖武朝を迎えようとする金村の

従駕歌は人麻呂の「離宮讃美」を踏まえ、千年の従駕歌は人麻呂の「天皇讃美」を踏まえようとしたとは言えないのだろうか。というのは、人麻呂の「天皇讃美」は国見歌の発想に立っており、千年の歌も国見歌の発想に立っていると考えられるからである。

国見歌の系列からいえば、

(1) 舒明朝の「天皇、香具山に登りて国を望たまふ時の御製歌」(1・二)は代作であろうが、天皇が山に登り自然を讃美し自然神(地霊)に豊饒を祈願する。

(2) 持統朝の「吉野の宮に幸す時に、柿本朝臣人麻呂の作る歌」(1・三八)は、天皇が高殿に登り国見をする。それを従駕歌作者が神のなせる業として臣下の立場で仰ぎ見、今を「神の御代」と讃美する。

では、千年の歌はどうか。

(3) 「(養老七年癸亥の夏の五月に、吉野の離宮に幸す時に)車持朝臣千年の作る歌」(6・九一三)は、先行する金村の歌(6・九〇七)が吉野離宮の神聖尊貴を讃美し、その由来を、人麻呂が「今」を「神の御代」と讃美したのを受けて、持統天皇・人麻呂時代を念頭に置いて「うべし神代ゆ定めけらしも」と歌うのを受けて、千年は山上で国見する位置から歌っている(内容については以下で考察する)。と見ることができよう。

千年の歌を儀礼歌と見られた清水氏は国見する位置に立ったのが作者自身であると考えられたが、私情歌と見られる諸説もこの点では同じである。しかし国見歌の発想にたつ宮廷儀礼歌は高所から天皇が国見するのを伝統とした。特に天武・持統嫡子系皇統にとっての聖地吉野における宮廷儀礼歌ではその伝統は強く意識されていたと見るべきであろう。

この歌は、作者千年が山上の元正女帝の立場で吉野に臨んでいるというべきではないだろうか。この点で清水氏の代作説に賛同できるように思う。女帝の立場での歌であるならば、例えば井村氏が表現について指摘されたように女性的で相聞的な発想であることも理解できるし、それが私情的な性格を導いたということなのかも知れないからである。

私見では政治的歴史的な社会的状況や政治的な事情がそのまま生のかたちで歌に表現されるとは考えないし、歌は表現としての自律性をもつと思う。しかし、だからといって、社会的状況とかその状況下の作者の心情や思想が何らかのかたちで表現に反映することもあるのは全く否定できるものでない。表現に即した精緻で微視的な検討によって解決できない問題は、少し

視野を広めて見ることによって解決の道を見出せるかも知れない。そういった意味から、この時の吉野行幸の意義を考慮することによって、千年の歌を再検討したいと思うのであるが、その前に、この歌の表現について触れておく必要があるだろう。

四　表現の検討

まず、長歌の冒頭の「味凝り　あやにともしく」の表現であるが、この歌の他には先例となる一例しかない。「天皇（天武天皇）の崩りましし後の八年九月九日の奉為の御斎会の夜に、夢の裏に習ひたまふ御歌」（2・一六二）の中で、

神風の　伊勢の国は　沖つ藻も　靡みたる波に　潮気のみ香れる国に　味凝り　あやにともしき　高照らす　日の御子

と「高照らす　日の御子（天武天皇）」が希有な存在であるところから、名状しがたいほど貴く慕わしいと、神霊としての天皇を尊崇讃美する心情を表している。当面歌の吉野も「味凝り　あやにともしき」天武天皇ゆかりの地であり、人麻呂の従駕歌以来讃えられてきた聖地であり、他方、藤原不比等の吉野詩以来、神仙の世界として憧憬されてきた霊地でもあり、その地への思慕憧憬の表現は、讃歌にふさわしい簡潔な歌い出しとなっていると考えられる。

次に、この作品が相聞的な私情歌と解される要因になった「紐解かぬ　旅にしあれば」の「紐解かぬ」であるが、相聞歌では「紐解く」は男女の逢会にかかわる常套的な表現として見られる。だがそればかりでなく、一方では、「紐の緒解く」「紐解き放く」「紐解き開く」などの表現がある。

(1)「紐解く」――「紐の緒解く」「紐解き放く」「紐解き開く」の例

①…いふかりし　国のまほらを　つばらかに　示したまへば　嬉しみと　紐の緒解きて　家のごと　解けてぞ遊ぶ…夏草の　茂くはあれど　今日の楽しさ（9・一七五三）　高橋虫麻呂集

②難波津に御船泊てぬと聞こえ来ば紐解き放けて立ち走りせむ（5・八九六）　山上憶良

③天離る鄙にある我をうたがたも紐解き放けて思ほすらめや（17・三九四九）　大伴池主

④…もののふの　八十伴の男の　島山の　明かる橘　髻華に刺し　紐解き放けて　千寿き　寿きとよもし　ゑらゑらに　仕へ奉るを　見るが貴さ（19・四二六六）大伴家持

⑤高円の尾花吹き越す秋風に比毛解き開けな直ならずとも
（20・四二九五）大伴池主

⑥ほととぎすかけつつ君が松蔭に比毛解き放くる月近づきぬ（20・四四六四）　大伴家持

①は高橋虫麻呂集の「検税使大伴卿の筑波山に登る時の歌」で、「紐の緒解く」とは「家のごと　解けてぞ遊ぶ」つまり家庭的にうち解ける意（山遊　社交性）である。

②は山上憶良の「好去好来の歌」の反歌で、「紐解き放く」は相手の帰着を歓迎する心で、再会の呪の紐を解いて、の意（歓迎　社交性）である。

③は大伴家持が越中守として赴任して間もない館の集宴における大伴池主の歌で、「紐解き放く」は心ゆるす、うち解けるの意（交友　社交性）である。

④は大伴家持が天皇(孝謙)の催す新年の賀宴を予想して作った歌で、「紐解き放く」はうちとける気持ちで、衣服をくつろげるの意（賜宴）であるが、賀宴のような晴れがましい改まった場でもこのような表現がみられることは注意してよいであろう。

⑤は二三の大夫らが、それぞれ壺酒を携えて高円の野に登った時の歌で、「紐解き放く」はくつろぎ遊ぶの意（野遊　社交性）である。

⑥は聖武太上天皇・光明皇大后の河内離宮行幸の折に、河内国の馬国人の家の宴で大伴家持が興によって作った歌で、「紐解き開く」はくつろぎ、お互いに心をゆるして交歓するの意（宴席）である。

右の②以外は、うち解けて寛ぐ意である。これらと逆の意味を考えるので足りるではあろうが、「紐解かず」の例も見ておきたい。

(2)　「紐解かぬ」――「紐解かず」「紐解き放けず」の例

a・旅の歌

①…さ丹つらふ　紐解き放けず　我妹子に　恋ひつつ居れば…　音のみし泣かゆ（4・五〇九）　丹比笠麻呂

②旅の夜の久しくなればさ丹つらふ紐解き放けず恋ふるこのころ（12・三一四四）　作者未詳

③家にして結ひてし紐を紐解き放けず思ふ心を誰か知らむも（17・三九五〇）　大伴家持

④…石上　布留の里に　紐解かず　丸寝をすれば…　恋はまされど（9・一七八七）　笠金村集

⑤…あらたまの　年の五年　敷栲の　手枕まかず　紐解かず　丸寝をすれば　いぶせみと…（18・四一一三）

一　大伴家持

⑥天離る鄙に月経ぬしかれども結ひてし紐を解きも開けなくに（17・三九四八）　大伴家持

⑦…妹なねが　作り着せけむ　白栲の　紐をも解かず　一重結ふ　帯を三重結ひ　苦しきに　仕へ奉りて…

（9・一八〇〇）田辺福麻呂集

b・恋の歌

①しぐれ降る暁月夜紐解かず恋ふらむ君と居らましものを

（10・二三〇六）作者未詳

②紐鏡能登香の山の誰がゆゑか君来ませるに紐解かず寝む

（11・二四二四）作者未詳

③足柄の箱根の嶺ろのにこ草の花つ妻なれや紐解かず寝む

（14・三三七〇）作者未詳

④高麗錦紐の結びも解き放けずいはひて待てど験なきかも

（12・二九七五）作者未詳

aの旅の歌では、

①～③は「紐解き放けず」が「恋ふ（思ふ）」にかかっている表現で、他の女性に心を移さずに、妻を思っている一途な心を述べている。

④⑤の「紐解かず　丸寝をすれば」は衣の紐を解かずに旅寝をしているので「恋はまされど」と一層恋い焦がれる、とか、逆に「いぶせみ」と心が晴れないという心情を引き出す。

⑥は妻の結んだ紐を解くあだし心はないのに、妻に逢えないのを嘆いている。

⑦は丸寝してひどくやせ衰えながら苦役に奉仕している様子を叙述している。

bの恋の歌では

①は紐も解かずに恋うていてくれるの意。

②は紐解かずに寝るようなことはしないの意。

③の「花つ妻」は初々しく匂わしい妻（中西氏『万葉集』講談社本）、触れてはならぬ期間の妻（伊藤氏『萬葉集釈注』）の意。中西氏が花妻とはいえない女よ共寝しようにと解しておられるのが参考になる。

④は身をつつしんで神に祈って待っているが効果がない。

これらのほとんどが相聞的意義をもつ中で、注目されるのは、

a⑦「白栲の　紐をも解かず　…　苦しきに　仕へ奉りて」

b④「紐の結びも解き放けずいはひて」

のような例が見られることであろう。a⑦の「紐解かず」は公の仕事（つまりは大君）への奉仕にかかわって用いられ、b④の「紐解かず」は「いはふ」（呪術をおこなうとか神に祈る）に

不可欠なこと（精進潔斎）として表現されている。

このように、「紐解かず」は、①「紐解く」が社交的な場や公的な場において「くつろぐ・うち解ける」の意味をもつことの反意語として、また②「紐解かず」が公的な奉仕とか神事などに対する「慎み」の意味をもつ語として、理解することが可能である。

これらの用例から、「紐解かぬ旅」は「くつろがぬ(あらたまっての）旅」、「身を慎んでの旅」という解釈も可能になるであろう。

このような「紐解かぬ　旅にしあれば」に続いて「我のみして　清き川原を　見らくし惜しも」と結ばれるが、自分だけで清き川原を見ることが惜しまれるほどこの景は美しいという、吉野の自然讃美の表現であろう。「紐解かぬ」以下は、「謹み臨んでいる旅ではあるが、私だけが清い川原を見るのが惜しく思われる」の意味となろう。とすると「我」の念頭に置く対象が、「妻」あるいは「夫」という限定がなくなる。

一方、反歌の「三船の山は畏けど」について、「代匠記に『腰ノ句ハ山神ヲ敬テ、カケテ申モ恐レアルコトナレド、云ナリ』とあるやうに、山の神の霊威を憚るべきであるが、の意」（澤瀉氏『注釈』）で、この歌を私情歌とみる説は「三船の山の霊威は畏れ多く、身も慎まれる」（伊藤氏『釈注』）、「思うも恐れ多く、思慕することもはばかられる」（中西氏『万葉集』）などと解しておられる。金子氏『評釈』は「思慕する人を当面の山に準擬し、畏い事だが、思ひ忘れる時とてないと呻吟した」作者千年は「或る貴女に恋していた」と想像され、作者を女性と見る井村氏は逆に「或る貴紳に恋していた」と想像される。

他方、この作品を儀礼歌と説かれる清水氏は、この作品の相聞歌的性格は反歌においていっそう明らかであるとし、「滝の上の三船の山は畏」しと、上三句において、吉野讃歌にふさわしい畏みの心を述べてはいるが、この叙述は、逆接の助詞「ど」によって「思ひ忘るる時も日もなし」と結合されて、「畏」いにもかかわらず、都に留まった人を片時も忘れ得ないという、相聞的私情こそがこの一首の主情となっているとされ、その対象が皇太子であることによって儀礼歌たりうると見られた。

ところで、「滝の上の三船の山」とはどのような山であったのだろうか。

(3)　「三船の山」

①滝の上の三船乃山に居る雲の常にあらむと我が思はなくに（3・二四二）　　弓削皇子

②大君は千年に座さむ白雲も三船乃山に絶ゆる日あらめや

（3・二四三）春日王

③み吉野の御船乃山に立つ雲の常にあらむと我が思はなくに（3・二四四）　柿本人麻呂集

④滝の上の　御舟乃山に　瑞枝さし　繁に生ひたる　栂の木の　いや継ぎ継ぎに　万代に　かくし知らさむ　み吉野の　秋津の宮は…（6・九〇七）　笠金村

⑤滝の上の三船山ゆ秋津辺に来鳴き渡るは誰呼子鳥（9・一七一三）作者未詳

⑥朝霧にしののに濡れて呼子鳥三船山ゆ鳴き渡る見ゆ（10・一八三一）作者未詳

①は、三船の山に懸かる雲のように、変わりなくいるだろうとは、私には思えない、と悲観的であるが、

②は、①に対して、いや、大君は長寿でいらっしゃいましょう。白雲も三船の山に絶える日はあるでしょうか、と慰藉的である。

③の、三船の山に湧き立つ雲が絶えないように、変わりなくいるだろうとは、私には思えないことだ、という一首は①と異伝関係にあり、①と③はともに人麻呂作である可能性もある。

④は、車持千年と同じ時の従駕歌の表現で、三船の山に美しい枝を一面にひろげた栂の木のように、ますます次々と万年の後までも、このように支配なさるであろうと吉野の秋津の宮の讃美予祝にふさわしい。

聖地吉野を神仙境に擬する詩が藤原不比等以来の伝統となっているが、三船山をその仙境観において理解できるとされたのが中西進氏で（「終南山」『ユートピア幻想――万葉びとと神仙思想――』平成5）、不老長生の願望が求めた霊山に三船山を宛てて考えたと推定されたのは当たっているのではあるまいか。金村の従駕歌は「三舟の山に　瑞枝さし　繁に生ひたる　栂の木の　いや継ぎ継ぎに」とその霊山に威勢よく繁茂する栂に託して「万代」の治世を讃えるのである。そのような三船山であるから、なおのこと命のもろさ、はかなさを覚えたのが三船山に託した弓削皇子の歌であり、三船山に託して慰めたのが春日王の歌であったのであろう。畏き山にかけて高貴な人の命のもろさが表現され、あるいは長寿が願われたのである。では、千年の歌はどうか。

滝の上の三船の山は畏けど思ひ忘るる時も日もなし（6・九一四）

霊山の三船の山は畏いが、申すも恐れ多い方のことは片時も忘れられない。不老長生の霊山を見るからこそ（既に儚くなら

れた）あの方のことが片時も忘れられないという意味ではないのか。

では、或本の反歌二首はどうか。

或本の反歌に曰はく

千鳥鳴くみ吉野川の川音のやむ時なしに思ほゆる公　（6・九一五）

あかねさす日並べなくに我が恋は吉野の川の霧に立ちつつ　（6・九一六）

第一反歌の「やむ時なしに思ほゆる公」の相手はやはり男性であろう。吉野川の川音にいざなわれてしきりに思わずにおれぬ方を表現していると見るべきであろう。

第二反歌の「我が恋は吉野の川の霧に立ちつつ」の恋とは、

明日香川川淀さらず立つ霧の思ひ過ぐべき恋にあらなくに　（3・三二五）山部赤人

と同じ発想で、吉野の川に纏綿する深い思いを「恋」といったものであろう。

或本反歌が当初の作であったとする伊藤氏の説に共感を覚えるのだが、初作（或本の反歌）では慕う相手が専ら男性に向けられていた。それが、最終的反歌には男女に対する思慕へと改変されたと見ることができるのではあるまいか。

この問題を考えるために、この時の吉野行幸の意義を確認する必要があると思われる。

五　吉野行幸の意義

この年の吉野行幸の重要さは清水、小野、吉井、伊藤諸氏が指摘されたところである。

吉井巌氏（『全注』）は、持統天皇から文武天皇への皇位継承にあたって、持統十一年（六九七、八月譲位）に皇太子軽皇子をともなった吉野行幸が行われ、その後に譲位してしばらく持統上皇の執政がつづくが、大宝元年（七〇一）に文武天皇の実質的な新政治の開始を意味する文武天皇の吉野行幸が行われたと推定され、天武天皇の孫文武の新政は、吉野行幸の儀礼的反復によって実質を獲得すると指摘され、これと全く同じ展開を見せるのが文武天皇の子聖武天皇即位前後の吉野行幸であるといわれたのは示唆的である。

確かに同じ展開を見せているが、その実質にはかなりの径庭もあろう。持統女帝（皇后を経験）は、十五歳の孫軽皇子（文武天皇）に譲位した後も、太上天皇として執政を務める。これに対し、元明女帝（皇太子草壁の妻、皇后未経験）は、文武と

同じ十五歳になった首皇子（聖武天皇）には譲位せずに、さらに娘の元正女帝（独身、もちろん皇后未経験）に譲位して自分は太上天皇となり、やっと十年後に首皇子が二十四歳に達した時期に元正女帝は譲位して太上天皇としてなおも政治にかかわる。このように皇位継承に限って見ても、皇后を経験しない女帝が二代も続き、一人は未婚でもあり、しかも二人とも太上天皇になるという異例の事態が続くのである。

その端緒は、天武・持統両帝が二人の血筋の皇子を正統な皇位継承者にしようとしたことにあるのは周知の通りであろう。草壁皇子を皇太子に立てたが即位せずに薨ずると、正統な皇位後継者を護持しようと、草壁皇子の遺児軽皇子の成長を待って祖母の持統女帝が即位するが、軽皇子の立太子にあたっては衆議の紛糾を見たことは『懐風藻』葛野王伝に見られる。さらに、文武天皇の妻に皇族出身者はなく、夫人の藤原朝臣宮子娘に嬪（妃とあるのは誤り）の紀伊朝臣竈門娘・石川朝臣刀子娘と有力貴族出身者だけで、皇位継承をめぐって貴族権勢家の利害も関係することになり、文武天皇から聖武天皇への継承は必ずしも順調とはいえなかったようである。

その中で、結果的に藤原夫人宮子所生の首皇子の地歩が次第に固まるに至ったのは、宮子の父藤原不比等が大宝律令選定の実質的な中心となり、撰定の過程においても、運用においても、実務的な知識や才覚を発揮することによって、他の貴族を凌駕したことが考えられる。不比等は第一段階として宮子を夫人として皇子をもうけ、姻戚関係をもった天皇家の地位安泰に大きく貢献して厚い信望を得るとともに自家の権勢の強化を願い、孫の皇子を即位させることによって天皇の祖父たる「外親」（外戚）となることを切望し、そのためには可能なかぎりの手立てを講じたであろう。その一つに、大宝令で太上天皇を譲位後の天皇の定称とすることを規定して、文武天皇を政治的に後援した持統女帝の立場を法的に追認し、持統・文武両帝の信頼を厚くしたことが上田正昭氏によって指摘されている（『藤原不比等』昭和61）。その後自動的に譲位の天皇を太上天皇と称する道を開いたこと（「太上天皇。譲位帝所レ称。」（儀制令））が、首皇子の即位に有利になったことは云うまでもない。その一方で、持統以来の女帝の信任を得て後宮に力を持ち、皇子の養育にも関わったと見られる県犬養宿祢三千代（美努王の室）と不比等は結婚し、安宿娘（のちの光明皇后）を得るという僥倖に恵まれて、さらに後宮にも影響力を浸透させ、女帝たちと皇子とのつながりを一層緊密化した。そのことを明確に物語るのが上山春平氏や上田正昭氏が指摘される「黒作懸佩刀」の伝承であり、

表に向けては政治的な力関係やその動向に深く配慮しつつ、首皇子の即位に向けて強調された「不改常典」の論理であろう。

「黒作懸佩刀」にともなう伝えは「東大寺献物帳」に見られる記事で、既に上山春平氏（『神々の体系』昭和47年、『続・神々の体系』昭和50年）や上田正昭氏が触れておられる。

黒作懸佩刀一口（体裁については略）

右、日並皇子（草壁皇子）常所二佩持一、賜二太政大臣（藤原不比等）一。大行天皇（文武天皇）即位之時、便献二大行天皇一、崩時亦賜二大臣一。大臣薨日、更献二後太上天皇（聖武天皇）一。

現物は失われているが、刃渡り一尺一寸九分、柄や鞘は黒漆塗りで、紐で腰に吊る刀であったという。伝えによると、この佩刀は草壁皇子が不比等に賜り、文武の天皇即位の時に不比等が献上し、文武天皇が没する時に不比等に賜り、不比等が薨ずる時に首皇子（聖武）に献上したという。天皇（皇太子）が臣下に賜与するのは厚い信任を意味し、臣下が天皇に献上するのは臣従・忠誠の証しとなるものであり、これには当然持統・元明両女帝も介在していたはずである。この伝えによって、女帝を中継ぎとする皇位継承に、不比等が深く関与していたことが知られる。

また「不改常典」であるが、宣命の中で女帝の即位と皇子の即位の根拠に「不改常典」を掲げているのは、元明女帝と聖武天皇の時で、その間に介在した元正女帝の時にはない。この「不改常典」の意図は元明女帝即位の時点で、聖武天皇即位への路線を敷くことにあったのは明らかで、その内容が明確に示されているのは、聖武即位の宣命であろう。

かく賜へる時に、みまし親王（首皇子）の齢の弱きに、荷重きは堪へじかと、念し坐して、皇祖母と坐しし、掛けまくも畏き我皇天皇（元明）に授け奉りき。此に依りて、是の平城大宮に現御神と坐して、大八嶋国知らしめして、霊亀元年に、此の天日嗣高御座の業食国天下の政を、朕に授け賜ひ譲り賜ひて、教へ賜ひ詔り賜ひつらく、「掛けまくも畏き淡海大津宮に御宇しし倭根子天皇（天智）の、万世に改るましじき常の典と、立て賜ひ敷き賜へる法の随に、後遂には我子（首皇子）に、さだかにむくさかに、過つ事無く授け賜へ」と負せ賜ひ詔り賜ひしに、（略）

この趣旨では、①元明女帝が直接的に譲位できなかったのは、親王（首皇子）がまだ年若く、政務の重任に耐えられないこと、②元正女帝は母元明女帝から天智天皇の「不改常典」に従い、「我が子」（首皇子）に間違いなく皇位を伝えるよう教えられた

こと、が強調されている。

①については、角田文衛氏が明らかにされたように、首皇子が皇太子に立つにあたって、文武天皇の妻であった石川・紀の二嬪が嬪の資格を剝奪され、その皇子は皇太子になる道を阻まれていること(「首皇子の立太子」『角田文衛著作集　第三巻』昭和60年)、また藤原不比等に次いで元明上皇が没するとすぐに多治比三宅麻呂が謀叛を誣告し、穂積老が乗輿を指斥したという元正女帝に対する不穏な動きがあり、実際にはどのような事件があったか詳らかではないが、横田健一氏は事件の背後に長屋王の存在を推測されていること(『古代王権と女性たち』平成6年)などに窺われるように、首皇子即位への路線は決して順風とはいかなかったようである。元明女帝から元正女帝への不自然に感じられる譲位は、恐らく政治的な力関係や状況に敏感であった不比等の判断もあって、首皇子の即位を急ぐことによって生ずるかも知れない問題を先送りしたり、鎮静化するための時間かせぎであったのであろう。不穏な動きに一応の収束をみ、元明太上天皇の一周忌を終えた時期に、養老七年の吉野行幸が実行されるのである。

②については、「不改常典」を天智が立てたという点の真偽、また皇位継承法の意味するところ(兄弟継承を否定する直系継承)について諸説があり、その諸説の展開については、新日本古典文学大系本『続日本紀　一』の補注に詳しいが、この時期に天智天皇に託して主張されたとする上田正昭氏の説(『女帝――古代日本の光と影――』昭和46、『藤原不比等』昭和61)が説得力をもつ。上田氏は藤原不比等の父鎌足が天智天皇を補弼したように、天皇と藤原氏の共同執政ないし補政体制の含みも考慮されている。持統女帝と元明女帝は天智天皇の娘――異母姉妹(持統の母は蘇我遠智娘・元明の母は蘇我姪娘)であり、元正女帝は孫娘である。そればかりでなく不比等の出生について、天智天皇の子であるという伝承もある。不比等を権威づけるためのものである可能性もあるが、天智天皇を交点として女帝と不比等を不即不離の関係で結びつけようとする志向が働いていることは疑いない。女帝たちと不比等は相互の立場で押し進める(天武持統直系の)首皇子の即位の一点で、その利害は一致していたのであり、「不改常典」を天智天皇の定法であると仮託することは十分にありえたであろう。

このような深奥の動きが顕在化して、いよいよ吉野行幸が実施されようとする直前の養老六年十二月十三日に、元正女帝は天武天皇(朱鳥元年九月九日忌日、三十七年目)のために弥勒像、持統女帝(大宝二年十二月二十二日忌日、二十一年目)の

ために釈迦像を造らせる旨の勅を下した。持統女帝の二十一年目の年忌を控えての追慕供養の意味があったであろうが、①持統女帝以来の宿願である天武直系の皇子の即位の運びとなり、②持統女帝の文武天皇への譲位に際しての行幸と同じ趣旨の吉野行幸の実施を期しての造顕であったろう。この吉野行幸が天武・持統両帝の供養追慕と結びつく重要な意義をもつものであったことが知られる。

養老七年における元正女帝の吉野行幸は、諸種の曲折を経ていよいよ譲位の時が至り、待望の「首皇子の即位を予祝するのが目的であった」らしい（伊藤氏『釈注』）。元正女帝は吉野に臨んで、重責を果たす喜びと同時に、ある種の寂寞を覚えたのではないか。首皇子の即位への道を、自分もその役割の一端を担ったのであるが、それぞれの立場で万難を排し、知略をめぐらし、手だてを講じてきた元明太上天皇と藤原不比等は既に相継ぎ没しており、自らの努力の結果を遂に見ることがなかった。元正女帝の行幸には喜びとそれと切り離せない追慕の情がまつわっていたことを想像するのは無理ではあるまい。

このたびの吉野行幸の事情を考えると、車持千年の従駕歌は、元正女帝のそのような心情に沿った詠出ではなかったろうか。

六　天皇の歌

天皇の行幸歌や女帝たちの歌には、ある種の傾向が認められ、今の千年の歌の性格を推測する一助になるように思われるので、見ておきたい。

(1)　天皇の吉野行幸歌

①　天皇（天武）、吉野の宮に幸す時の御製歌

淑き人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よ良き人よく見（1・二七）

紀には、八年己卯の五月庚辰の朔の甲申（五日）に、吉野の宮に幸す、といふ。

②　大行天皇（文武）、吉野の宮に幸す時の歌

み吉野の山のあらしの寒けくにはたや今夜も我がひとり寝む（1・七四）

右の一首は、或いは、天皇の御製歌、といふ。

(2)　女帝の歌

①　背の山を越ゆる時に、阿閉皇女（元明）の作らす歌

これやこの大和にしては我が恋ふる紀伊道にありといふ名に負ふ背の山（1・三五）

②　和銅三年庚戌の春の二月に、藤原の宮より寧楽の宮

に遷る時に、御輿を長屋の原に停め、古郷を廻望て作らす歌一書には、太上天皇(持統)の御製、といふ。

飛ぶ鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ一には、君があたりを見ずてかもあらむ、といふ

(1・七八)

③　先太上天皇(元正)の御製　霍公鳥の歌一首日本根子高瑞日清足姫天皇なり

ほととぎすなほも鳴かなむ本つ人かけつつもとな我を音し泣くも(20・四四三七)

①は、左注によると、天武天皇八年(六七九)五月五日、天武・持統夫妻は六皇子に不変の忠誠と結束を誓わせた莫逆の盟約が行われた時の作と見られる。冒頭の「淑き人」は天武天皇と持統皇后を寓し、結句の「良き人」は皇子たちが考えられている(伊藤博氏角川文庫版『万葉集』下注)。天武天皇が壬申の乱で王権を得るまでに雌伏した過去を回想し、王権を確立した現在を対比しつつ、現在の繁栄をあらしめた歴史的な吉野を讃美した歌が、その後の吉野を聖地とし、吉野を讃美する従駕歌の始源として重要な意味をもったと考えられる。その天武天皇の孫文武天皇の作と伝えられる吉野行幸歌はどうか。

②は、上句の表現からすれば、大宝元年二月の折の作かと推定される。題詞は文武天皇の吉野行幸時の従駕者の作歌の意味に解しても不思議はない。しかし左注によれば、天皇(大行天皇の略記と推定される…天平十七年(七四五)の段階の集成時に付されたとする伊藤説)の作であると伝える(拾遺集巻一三ではよみ人しらず、新勅撰集巻八では持統天皇御製歌との異伝あり)。このような異伝をともなう文武御製歌は、代作である可能性が高いと言わねばならないが、「はたや今夜も我がひとり寝む」は対としての家郷の妻を思慕する心があり、羈旅の歌における家郷思慕の歌と解される。

この歌で注目したいのは、「ひとり」を意識する歌が天皇の立場で(代作として)表現されていることである。当面の千年の長歌では「我のみして」とあり、ほとんど「ひとり」の意味のようであるが、「ふたり」に対する「ひとり」の意味(夫から妻を、妻から夫を思慕する「ひとり」)に限定しきれない、微妙な相違が感じられる。この点は今措くとして、千年の歌が天皇の思いに即して歌ったと考えるのに示唆的ではあるまいか。

次にもう少し視野を広げて女帝の行幸時の作と伝えられる歌を見たい。

③は、旅の通過地を讃美する歌であるが、詠まれたのが直前の川島皇子(憶良の代作と考えられる)歌(1・三四)と同じ

持統四年（六九〇）の紀伊行幸の折とすれば、阿閉皇女（元明）は夫の草壁皇子が没した翌年で一周忌は過ぎており、「背の山」の名に引かれて「背」の君草壁皇子に対する思慕追懐が込められている。讃美と思慕追懐が混融しているのである。これも、当面の千年の歌の発想を考えるよすがになりはしないだろうか。

④は、題詞によると元明女帝が平城遷都の途中、長屋の原で明日香の里をかえり見ての「作歌」という。「作らす歌」と訓んで元明女帝の御製歌とするが、題詞の下注には太上天皇(持統)の御製歌の異伝をともなう。伊藤氏『全注』は「旧都惜別の歌として当代の人々に普及していた歌、しかも、藤原京の主であった人の歌が持ち出されたことは確かで、（略）古歌利用の一つであった」とされるのがあたっていよう。

持統女帝の場合、藤原京遷都の際に作られたとすれば、檜隈大内陵に眠る夫天武天皇と真弓丘陵に眠る子草壁皇子を「見ずてかもあらむ」と強い愛着をみせる。元明女帝の場合、平城京遷都の際に、古歌を利用したとしても、檜隈大内陵には姉持統女帝が天武天皇と合葬され、その南方の檜隈安古山陵には子の文武天皇が眠り、その西方の真弓丘陵には夫草壁皇子が眠る。天武天皇系の陵墓があるこの地に対する愛着思慕の情が窺われる。

題詞に「作歌」とある点について、西本願寺本・金沢文庫本には「御作歌」とあるのによって「作らす歌」と訓むが、元暦校本・広瀬本・類聚古集には「作歌」とあり、実際の作者は別であったとも考えられ、代作歌であった可能性があろう。元明女帝が持統女帝の歌を利用したのであるとして、歌と作者の関係が動きうる一つの要因として代作性があるのではないか。

また当の吉野行幸の主である元正女帝の歌で、当面の千年の歌を考える上で参考になると思われるのが、⑤の一首である。

内命婦の薩妙観が詔に応えて和歌を奉っているから、内輪の宴での歌であろうか。ホトトギスの鳴く音が「もとつ人」（旧知の人、故人の翻訳か）を思わせて涙するという。代匠記は元明太上天皇崩じて「明ル年ノ夏ニ至テ、郭公ノ鳴ヲ聞食テ、シノヒ参ラセ給ヒテ」詠んだとし、「もとつ人」は元明太上天皇を指すと推測するのに従ってよいのではないだろうか。ホトトギスは懐旧を誘う鳥とされるが、異名として蜀魂という。蜀の望帝の魂魄が化してほととぎすになったという伝説があり、望帝は譲位の後、再び帝位に就こうとしたが果たさずに死に、その怨恨が残って鳥に化し、昼夜を分かたず悲しく鳴いたと伝えられる（『華陽国志』）。元明女帝は元正女帝に譲位し、太上天皇とし

て元正女帝を支えながら首皇子の即位を待望しつつ、その時を待たずに没したのであり、元正女帝はホトトギスの海彼の伝説に引かれながら、亡き母元明を思慕したと考えられるのではあるまいか。

これらの天皇の歌を見ると、天武天皇の歌を起点として、後の女帝の作と伝えられる歌には、行幸にあたって、内容的に、①現在を見ること（讃美）を契機に、②私情とも思われるような過去への追懐（思慕）が喚起されている。また、作者の異伝をともなう歌には③代作性が窺われるのである。これらの点は、千年が女帝の心情に沿って歌を詠んだという推定を助けるのではあるまいか。

さらに言えば、これらの行幸歌も、宴の歌も、天皇・女帝の歌は私情歌の類である。天皇・女帝の私情的な発想にもとづき、歌人が儀礼の場で天皇・女帝の心情に沿って表現する時、それは公的な歌となり得るものであろう。それは私情歌の如くでありながら、やはり儀礼歌なのである。その意味で、千年は吉野従駕歌の中にあって異例のようではあるが、決して別系列として扱われるべきではあるまい。ただ、私情歌的な性格が、この頃の従駕歌、吉野を離れての従駕歌に相聞的発想の歌を可能にしたという意義は認めねばならないであろう。千年の従駕歌の世界で果たした役割は決して小さいとは言えまい。

七　代作者車持千年

では、吉野の従駕歌でこのような歌い方、天皇の心情に沿っての代作は可能であったのか。あったとすれば、それは千年の家の車持氏が藤原氏とかなり親近な関係にあったことによるのではあるまいか。藤原不比等については次のような伝承がある。

① 内大臣鎌足第二子也。一名史。斉明天皇五年生。公有二所レ避事一。便養二於山科田辺史大隅等家一。其以名レ史也。母車持国子君之女。与志古娘也。公官任至二右大臣正二位一。云々。（「藤氏大祖伝、不比等伝」『尊卑分脈』）

② 斉明天皇五年己未正月。天皇自二紀伊国温泉一還宮。是歳、皇太子天智天皇。妊寵妃御息所車持公女婦人賜二於内臣鎌子一。已六箇月也。給二件御息所一之日。令旨曰。生子有レ男者為二臣子一。有レ女者為二我子一。爰内臣鎌子守二四箇月一。厳重令レ遂二生産一。其子已男也。仍如二令旨一為二内臣子一。其子贈太政大臣正一位勲一等藤原朝臣不比等。諡号淡海公也。（『帝王編年記』）

③ 中納言　正三位藤原朝臣不比等　四十三　三月十九日

任。叙直広一。廿一日停中納言為大納言。(年四十三)。改直広一授正三位。実天智天皇々子云々。内大臣大織冠鎌足二男。(一名史)。母車持国子君之女與志古娘也。(車持夫人)。

(『公卿補任』文武天皇大宝元年)

『尊卑分脈』の系図には、大織冠鎌足の子として、まず不比等をあげてその尻付に「母車持国子君之女与志古娘」とあり、次に定恵を並べて尻付に「(母同不比等)とあるが、高島正人氏は、実は長男真人(定恵)の母は元来孝徳天皇の寵妃阿倍氏で、定恵は孝徳天皇の皇子であり、次男不比等の母は鏡王女(元来天智天皇の妃)であったと推測されており、車持君与志古娘は奈良時代以前の確実な史料にはその存在が知られないとして、この伝承を否定される(『藤原不比等』吉川弘文館、平9)。しかし、鏡王女と不比等が母子の関係にあったということもしかとは分からないのである。

『尊卑分脈』『帝王編年記』の伝承にもとづき、風巻景次郎氏は車持氏について「不比等は実は天智天皇の皇子であるという所伝が事実であって、この関係から、藤原氏の興隆にたよってすこしずつ官辺に顔を出す者も生じたのかも知れない」(「山部赤人」『風巻景次郎全集　3』昭和44)と推測され、また井村哲夫氏も同様に「中大兄皇子に寵され鎌足夫人となった与志古娘以来、不比等の外戚、房前や宇合、光明子らの縁続きであることを頼むことができた」と指摘されている(「車持朝臣千年は歌詠みの女官ではないか」『赤ら小船　万葉作家作品論』昭和61)。

車持氏は車持夫人与志古娘を介して天智天皇と藤原氏に結びつくのであり、千年が行幸に従駕する機会を得たのは、歌の心得があったことは勿論として、藤原氏との縁故によって推輓されて宮廷歌の場に加わり、天智天皇系の血筋の女帝と藤原氏のゆかりとして金村の儀礼歌よりもさらに元正女帝の心情に即して表現する立場に立ちえたのではないかと思われる。その立場とは、元正女帝にとっても、不即不離の藤原氏にとっても、待ち望まれた首皇子への譲位を予祝する行幸の場で、現前の吉野の聖なる自然を讃美しつつ、そこに皇子の即位を待望しつつこの晴れの場に加わることができなかった故人(本つ人)元明女帝と藤原不比等に対する追懐思慕の情を表現することであったろう。

長歌の結びは、慎まれるこの行幸で、自分だけが聖なる吉野の佳景を讃美しつつ、その中に故人たちとともに臨めなかったことを残念に思う元正女帝の心情を表しているのであろう。

これを受けて反歌では、聖地の三船の山は畏く思われ、この山にかけて思うのも恐れ多い故人のことは片時もわが心を離れ

ることはないと思慕の情を表していると解される。

或本反歌二首に関しては、伊藤氏が初案と考えられたのが妥当であろうと思われる。或本第一反歌は、思慕の対象を「公」と表現しているところが問題になっているが、藤原氏と縁故のあった車持千年は元正女帝の立場に立ちながら、不比等を念頭において表現したのではなかったか。そして或本第二反歌では、それに亡き母元明太上天皇への深い思慕の情も合わせて「我が恋」と表現したのではなかったか。ここで山部赤人が「明日香川川淀さらず立つ霧の思ひ過ぎなむ恋にあらなくに」(3・三二五)と深い懐古の情を「恋」といったことを想起すれば、前の年の十二月に天武・持統両帝ゆかりの吉野行幸を意識して、天武・持統のために造仏していることも考えあわせられ、元明太上天皇とさらに遡って天武・持統両帝に対する懐旧の情の強さを「我が恋」と述べた可能性もあるかもしれない。これが或本における初案だが、それが反歌のような表現になるのは、元明と不比等への追懐思慕に絞ったためであろうと考える。

以上のように見ると、車持千年の従駕歌は首皇子を即位にまで漕ぎつけるための重責を担った元正女帝が、それがいよいよ実現に向かう段階に至って、持統女帝の文武天皇への譲位儀礼としての吉野行幸を踏襲して、吉野の晴れの場に臨んだ折、旧門貴族高官石上氏(麻呂は和銅元年3月正二位左大臣、養老元年没。子に乙麻呂)に庇護されていたとみられる笠金村は「不改常典」の意を対して「いや継ぎ継ぎに　万代に　かくし知らさむ」と儀礼歌を献上し、藤原氏縁故の車持千年は国見する女帝の立場に立って、晴れの場吉野の讃美の中に、首皇子の即位のために尽力しながら見届けることなく没した元明太上天皇と藤原不比等を追懐思慕する心をこめて儀礼歌として献上した、と考えることができるように思う。

万葉歌の史的な展開という観点からみれば、女帝の立場で、女帝の歌の発想に立ったために千年の歌を特色づけた私情的相聞的な性格が、以後の従駕歌に相聞的な表現を導き入れる契機になったとも言えるのではあるまいか。